

聖書：マタイ 24：32～51

説教題：忠実で賢いしもべ

日時：2020年6月14日（朝拝）

イエス様が終末に関するメッセージを語られたマタイの福音書 24～25 章のいわゆるオリーブ山講話と呼ばれるところを見えています。今日はその中の 24 章最後の部分です。イエス様はこの講話において、エルサレム神殿崩壊とこの世の終わりを重ね合わせながら、二重写しにしながら、語っておられます。前回の 31 節までにおいて、それがどのように起こって行くのか、その大筋が語られました。これに基づいて今日の箇所から、では私たちはこの光の下でどう生きるべきかが語られます。この箇所を大きく 3 つに分けて見て行きたいと思います。

第一の区分は 32～35 節です。ここは実は解釈が難しいところです。32 節の「いちじくの木から教訓を学びなさい」という部分はそんなに難しくありません。「枝が柔らかくなって葉が出て来ると、夏が近いことが分かります。」ではこれを受けて語られた 33 節の「これらのことをすべて見たら、人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい」とあるところの「これらのこと」は何を指すのでしょうか。これも良く考えるとそんなに難しくはありません。あることを見て、主の再臨が近いと知りなさいと言われていたわけですから、それは再臨の出来事は含まない、つまり再臨について語られた 29～31 節は含まないこととなります。ですから「これらのこと」とは、4～28 節までに語られた内容を指していることとなります。しかし私たちにとって重大な問題は、この 33 節はこれからのことを語っているのかどうかということです。一見、これから起きる何か特別なしるしを見たら、主の再臨は近いと知りなさいと言っているかのように見えます。しかし次の 34 節にこうあります。「まことに、あなたがたに言います。これらのことがすべて起こるまでは、この時代が過ぎ去ることは決してありません。」 「この時代」とはイエス様がいた時代のことです。多少幅はあっても、イエス様の言葉を聞いていた人々が生きていた時代。大雑把に言えば 1 世紀のことです。その間に、「これらのことはすべて起こる」と言われています。33 節と 34 節の「これらのこと」は原文のギリシャ語でも同じですから、同じことを指していると考えられます。とするなら「これらのこと」はイエス様の時代にすでに起こったと私たちは考えるべきなのではないでしょうか。であるなら、それから時間が経っている今日になってもなぜ主の再臨は起こっていないのでしょうか。

ここには2つのメッセージがあると思います。その一つはエルサレム神殿崩壊は確かに「この時代」に起こるということです。34節の「これらのこと」とは、先に見ましたように、4～28節までのことで、特にエルサレム神殿崩壊がその中心にあります。それはイエス様の言葉に聞いていた人々の時代に起こるということを34節は語っています。このことはすでに23章36節で言われていました。イエス様はそこで、先祖からの積み重ねた罪に対するさばきが「この時代」の上に降りかかると言われました。そしてそのさばきは、エルサレム神殿崩壊を中心とするエルサレムへのさばきを意味することがその後語られていました。イエス様はこれは間違いのない確かなことであることを、今見ている24章34節で「まことに、あなたがたに言います」という言葉を加えて強調しています。また続く35節で「天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。」と語ることによって、さらに強調しています。そしてそのことは確かに紀元70年、当時の人々の時代に起こりました。またそれとセットになっている4～28節で言われていた様々なしるしも、その時代に起こりました。注意すべきは、イエス様はその時代に4～28節で述べたことがすべて起こり、その後の時代には起こらなくなるとは言っていないことです。この時代にわたしが述べたことはみな起こると言っただけであって、確かにエルサレム神殿崩壊を中心としてそれらのことはみな起こったのです。

すると33節はどう取れば良いのでしょうか。「これらのことを見たら」と33節で言われていますが、今、34節で見ました通り、それらはイエス様の時代に起こったわけですから、もうその段階は通り越したことになります。イエス様がこの言葉を語られた時点ではまだでしたが、紀元70年のエルサレム陥落を経て「これらのこと」は起こりました。とするなら人の子が戸口まで近づいている状態はすでに発生していることになります！ある人はそれからすでに2000年近くも経っているのに、これでは全然近くないではないかと言うかもしれません。しかしこの「近い」という言葉は時間的な意味ではなく、神のプログラムにおける次のステップはそれであるという意味で近いということです。イエス様はエルサレム神殿崩壊とこの世の終わりを二重写しで語って来られました。神殿の崩壊は最後のさばきの前触れとしての意味を持っています。その神殿崩壊は起きました。とするなら、あと残っているのは最後のさばきだけです。そういう意味で近いのです。もう間に入るプログラムはないのですから、いつその日が来てもおかしくないのです。ですから33節は私たちがこれから何かを見て、それによって再臨が近いこと

を知らないと述べている言葉ではないのです。もはや人の子は戸口まで近づいたという段階に私たちはいます。そのことを受け止めなければならないのです。

第二の区分は 36～44 節です。人の子が戸口まで近づいていると聞くと、私たちはいつそれが起こるのかと知りたくなります。もっと正確に、その年、その日を特定したい。これに対してイエス様は重大な言葉を 36 節で語っています。すなわち、その時がいつなのかは誰も知らない。人間はおろか天の御使いも、さらには子なる神イエス様も！とまで言われます。それはただ天の父なる神だけが知っておられることであると。ですから主の再臨はいつごろになると予言じみたことを言う人は聖書から外れていることとなります。聖書を暗号のように読んで、何年何月何日頃にそれは起きると語ったり、そういう本を書いている人は、その時点で異端です。聖書の立場を一言で言えば、私たちのすべきことは主の再臨がいつ起こるかを計算することではなく、いつでもいいように生きるということです。以下においては、その日はいつか分からないから、準備をしていないと突然その日は臨むことになるということが 3 つの例で語られています。

まず一つ目に、その日はノアの日と同じように実現すると 37 節以降にあります。ノアは洪水に備えて箱舟を製作しました。当然、人々はなぜあなたはそんなことをしているのかとノアに問うたと思います。ノアは言葉によって、また箱舟を作り続けるその行いによって、さばきの日について宣教しました。しかし人々は気に留めず、食べたり、飲んだり、めとったり、嫁いだりといった毎日の生活に明け暮れていました。そんな彼らに突然さばきが臨みました。気付いた時にはもう手遅れ。すべてがさらわれて行きました。

2 つ目に 40～41 節で「一人は取られ、一人は残される」と言われています。畑にいた二人の男は一緒に働いていました。この二人は兄弟だったかもしれませんし、親しい仲間だったかもしれませんし、父と息子だったかもしれません。自分たちはこれからも一緒にと彼らは思っていたでしょう。ところが再臨の日が来ると一人が取られ、一人が残された。それまでよく見えなかった二人の間にあった大きな違いが明らかにされたのです。それは一瞬のことであって、その日が来てからでは何の対処もできません。同様に 41 節の二人の女は母と娘だったかもしれません。あるいは姑と嫁、あるいは姉妹たち、あるいは親しい仲間だったかもしれません。しかし最後の日が来ると、二人の間にあった決定的な違いがはっきり現れる。神との関係がどうであったかによって、ある者は救

われ、ある者はさばかれるという全く異なった永遠の運命を受け取ることになります。

3つ目に43節に泥棒のたとえがあります。泥棒もいつ来るか分かりません。予告して来る人はまずいません。用心を怠っているところに突然来ます。イエス様はもちろん泥棒ではありませんが、予期せぬ時にイエス様が来た時のショックは、まさに泥棒に入られた時のショックに似ているでしょう。

ですからイエス様は42節でこのように命じています。「ですから、目を覚ましていなさい。あなたがたの主が来られるのがいつの日なのか、あなたがたは知らないのですから。」 また44節でこう言われます。「ですから、あなたがたも用心していなさい。人の子は思いがけない時に来るのです。」 私たちに命じられていることは「目を覚ましていなさい」ということです。もちろんこれは本当に眠ってはならない、いつも目を開けていなさいという意味ではありません。これは霊的な意味で言われています。では霊的に目を覚ましているとはどういうことでしょうか。それはここで教えられている主の教えにしっかり立つということだと思います。イエス様はここで、この世には終わりがあることをはっきり語っています。この世はいつまでも今のまま続くのではない。この世は神にさばかれることに向かっている。しかしこれまで見て来ましたように、その日はただ恐ろしい日ではありません。それは神の救いが最終的に完成する日でもあります。神はその日に向かってこの世界を支配し、導いておられます。この真理をしっかり受け止め、ここに立って生活することが「目を覚ましている」ということではないでしょうか。反対にこの視点を見失い、まるでこの世がいつまでも続くかのように考えて、この世のことばかりに心と体に向けて生きる人は、霊的な意味で眠りこけている人なのではないでしょうか。その人は食べたり、飲んだり、めとったり、嫁いだり、この世の生活に忙しい。しかしそういう重きを置いているこの世が突然終わりになる日が訪れて激しいショックを受けることになるのです。何も食べたり、飲んだり、めとったり、嫁いだりすることが悪いわけではありません。この世の生活を続ける上で、これらは必要です。しかし目を覚ましている人とは、これらのことをしつつも、ここのイエス様の言葉に従って先に来るものを見つめて生きている人です。色々な事がこの世にはあるけれども、神が全てを支配しておられて、必ず最後の救いの日、栄光の日を来たらせてくださることを信じて生きる人です。その人はその救いの完成の日をいつも見つめて祈る人になるでしょうし、その日に向かって今自分にできること、なすべきことに取り組む人になるでしょう。そういう人は、いつその日が来ても大丈夫。むしろそれは待ち望んだ喜びの

日、救いの日となります。このように生きることが「目を覚ましている」という生き方ではないでしょうか。

最後 45～51 節には、私たちの前に 2 つの生き方があることが示されています。私たちはここで主のしもべにたとえられています。念のためですが、これは私たちが卑しい立場に置かれているということではありません。私たちはただ神の恵みによって救われた者たちです。しかし神はそんな私たちをご自身の働きのために用いてくださいます。お前なんか役に立たないとは言わず、ご自身の素晴らしいご計画実現のために私たちを参加させ、用いてくださるのです。神はそのために私たち一人に一人に何らかの賜物と役割を与えてくださっています。最初に出て来るしもべは「忠実で賢いしもべ」です。彼は主人から与えられた務めを忠実に行う人です。ここではしもべたちの上に任命され、食事時に彼らに食事を与える任務が与えられています。それを忠実に行っています。また「賢い」と言われています。主人の心を良く理解し、主人と同じ心で、主人に喜ばれるあり方は何かを良く判断して行動する人です、これは今日の箇所に沿って私たちに適用すれば、終末に関する神のメッセージをよく理解し、神の心を我が心とし、どのように歩むことが神に喜ばれることであるかを悟って、そのように歩む人と言えます。そういう人は突然、主人が帰って来ても問題ありません。むしろ主人の心にかなまって働いている姿を見られて豊かに報われます。その人は全財産を任されるようになります。さらに大きな働きを与えられるのです。2 回あとの「タラントのたとえ」でも見ますが、ここに忠実に働いた者に対するやがての天の御国での報いは、さらなる奉仕であるという暗示があります。

もう一つの生き方は悪いしもべの在り方です。彼は「主人の帰りは遅くなる」と心の中で思います。そして任された働きを行わず、酒飲みたちと食べたり飲んだり・・・主人がいないことをいいことに、自分が主人になって好き勝手に生きます。まだ帰って来ないからしばらくは大丈夫！と、主人の心を無視した、今ここでの自分の楽しみを優先する生き方を続けた。これが霊的に眠りこけた人です。この人は主人が突然帰って来て恐ろしく慌てることとなります。そして待っているのは恐ろしいさばきです。マタイの福音書では偽善者が厳しく非難されていますが、その偽善者たちと一緒に罰を受け、永遠に泣いて歯ぎしりするのです。ここからいかに主の再臨はまだだと思ふことが危ないかを教えられます。私たちももし主の再臨はまだだと考え、その視界から消えている状態なら、非常に危ない。それは私たちの生活がこの世中心になっている証拠ではないで

しょうか。そうであるなら、主の日が臨んだ時、私たちは必ず大きなショックを受けるでしょう。また主はまだ来ないと考える時、私たちはこのたとえの中のしもべのように、自分がしもべであることを忘れて高ぶった振る舞いをする者になりやすい。これはやがての日を私たちにとって一層危険なものとしします。私たちは自分の中に、このしもべのように「主人の帰りは遅くなる」「まだまだその日は来ない」という思いがないかどうか吟味し、正しい見方を持つ者とされたいと思うのです。

果たして私たちは目を覚ましているのでしょうか。実際の目は閉じて眠ることがあっても、霊的な目は開いているのでしょうか。私たちはこの世界と自分の将来をどう見ているのでしょうか。聖書は今の世の終わりが来ると述べています。この世はいつまでも続くものではない。この世界はさばかれる。しかしその日に神はイエス・キリストに信頼する者たちを、約束の天の御国、完成された栄光の救いに入れてくださる。そのことを目を覚まして見つめているなら、私たちの今日の祈りと生き方は変わってくるはずではないのでしょうか。イエス様の再臨はいつ起こってもおかしくない状況にあります。33節の「人の子が戸口に立っている」という状況はすでに発生しています。ヤコブの手紙5章9節：「見なさい。さばきを行う方が戸口のところに立っておられます。」 私たちこのメッセージを改めて受け止め、この真理に立つ歩みをする者とされたいと思います。そしてその救いの完成の日が早く来ることのために日々祈り、そのために今ここで自分ができる働き、主に与えられている働きをする者でありたい。そうする人は主の再臨の日がいつ来ても驚くことはありません。むしろその日こそ待ち望んだ日、救いの日です。またその日はその幸いな人が大いに報われる日です。そのような目を覚ました忠実で賢いしもべの歩みを導かれてまいりたいと思います。